

児童期・思春期の Internalizing Problems に関する生態学的研究

西野 泰代

I. 問題と目的

青少年によって引き起こされた重大な殺人事件が相次ぐ一方、子どもたちの引きこもりや不登校の件数も年々増加の傾向にあることが報告されており、児童期、思春期の子どもたちのさまざまな不適応現象が大きな社会問題となって久しい。少子化や核家族化、都市化の進展や情報過多の社会など、青少年を取り巻く環境は著しく変化しており、家庭における教育機能の低下や地域との触れ合いの希薄化による子どもたちのモラルや社会性の欠如が問題行動の引き金となることも懸念されている。触法行為、不登校、引きこもり、自殺、拒食など子どもたちの不適応現象は、それが反社会的な形をとるにしろ、非社会的な形をとるにしろ、形として現れて初めてその存在に気付かされることが多い。こうした不適応問題を未然に防いだり或いは解決するための様々な対策が考えられ、たとえば、学校教育場面では、スクール・カウンセラーが積極的に導入されるようになり、社会全体として青少年の健全な育成に力を注ごうとしてはいるが、実際に、今を生きる少年たちひとりひとりが抱える“心”の問題を我々はどこまで理解しているであろうか。

本研究では、子どもたちを取り巻く様々な社会的環境の中から、家庭、学校、そして地域という三つの文脈それぞれにおける要因と少年自身の自己概念との関係から、問題行動へと至ることのない、健全な「心」の発達をサポートするための要因を検討した。ここでは、子どもたちの様々な問題行動の中でも非社会的な形で現れた不登校や引きこもり、そして抑うつ的な傾向を扱うこととし、これを Internalizing Problems と称した。

II. 方法

1. 調査対象

S市内の小学6年生603名(男子318, 女子285)と中学生329名[内訳: 1年180名(男子92, 女子88), 2年36名(男子18, 女子18), 3年113名(男子56, 女子57)], 計932名(男子484, 女子448)。

2. 調査時期 2003年9月。

3. 調査方法

S戸市教育委員会を通じて各小中学校に依頼書を配布。同意の得られた学校へ質問用紙を送付し、各クラス担任の指示の下に教室で実施された。

4. 質問紙の構成

- ① 子どもの行動について…日本版ユース・セルフレポートの中から Achenbach (1991) および倉本ら (1999) を参考に Internalizing Problems を問う28項目 (3件法)
- ② 子どもの自己概念について…Harter (1988) が開発した Self-Perception Profile for Adolescents の尺度を基に、古澤ら (1996) と稲葉 (1998) で使用された日本語版38項目 (4件法)
- ③ 家族機能について…FACESKG IV子供版 (立木, 1999) 28項目 (2件法)
- ④ 学校環境について…日本語訳修正版 CES (CESJ) の中から、平田ら (1998) を参考に23項目 (5件法)
- ⑤ 地域の教育機能に関する尺度 10項目 (4件法)

III. 結果と考察

1. 仮説の検証

① 子どもの自己概念との関連

子ども自身の自己概念に関しては、自身の外見に対する満足感や学業面での自信、自己価値の高さが児童期・思春期の Internalizing Problems を起こりにくくしていることが示され、【自己概念が高ければ、Internalizing Problems は起こりにくい。】という【仮説1】は支持された。

② 家庭環境との関連

家庭環境は自己概念に対して正の方向に関連を示し、子供たちが自分に自信を持ったり、友人関係をうまくこなしたり、行動の規範を獲得したりすることを助ける働きをしていることが示され、【家族のきずなが保たれ、親は状況に応じてうまく子どものかじとりができてることが、子どもたちの精神的健康をサポートする。】という【仮説2】は、一応支持されたと考えられる。

③ 学校環境との関連

下位尺度である<教師の態度>は、間接的に Internalizing Problems を緩衝していることが示され、また、<授業のゆとり>は、臨床群の子どもたちにおいて直接 Internalizing Problems を緩衝する要因であることが示された。全ての生徒を平等に扱い、どの生徒に対しても慈愛に満ちた態度で接し、生徒たちから信頼されるような教師であれば、生徒たちは自尊心が高められ、

自分に自信が持て、積極的な交友関係を持つことができ、Internalizing Problemsに至る危険性は少ないであろう。【子どもに認知された学校環境がその子にとって良好で快適なものであれば、子どもたちは学校生活を楽しむことが出来、子どもたちのInternalizing Problemsは起こりにくい】という【仮説3】は支持されたと考えられる。

④ 地域環境との関連

〈地域の教育力〉は自己概念を経由して、間接的に児童期・思春期のInternalizing Problemsを緩衝していることが示唆された。教室のような集団場面においては仲間に入ることができずに不安や緊張が強い子どもであっても、違うクラスや学校以外の場所で親友と呼べる存在がいれば、それが心の支えとなり、不登校や引きこもりといった重大な不適応行動に至ることなく学校生活を送ることができるということであろう。【子どもたちにとって地域の間人関係が良好なものであり、地域に子どもたちを受け入れる体制が整っていれば、子どもたちのInternalizing Problemsは起こりにくい】という【仮説4】は、支持されたといえよう。

2. 学年差と性差による検討

本研究では、小学6年生(11~12歳)から中学3年生(14~15歳)を対象としており、Internalizing Problems尺度得点分布で見た場合、中学3年生の女子の得点が一番高く、中学2年生の男子の得点が一番低かった。抑うつが児童期よりも思春期によく見られ、また、15歳頃までは女子の方が男子に比べ抑うつとなる率が2倍であるという知見もあり、うなずける結果である。中学2年生よりも中学1年生の得点が高いのは、小学生から中学生への移行の時期が、物理的な環境の変化だけでなく、精神的な自立を含めた家族関係の変化や生理学的な発達という身体の変化の時期と重なり、子どもたちにとってストレスが多く、認知的・社会的・情緒的な適応に危機が生じる時期でもあり、その時期を何とかやり過ぎた中学2年生は少し精神的な安定が見られるということであろう。小学生と中学生を比較してみると、小学生から中学生への移行にともなって親子関係の変化が見られることが示された。家族のきずなは保ちながらも、子どもたちは友人と過ごす時間を大切に、自分の責任の下に行動することを望むようになり、親からの精神的な自立がこの時期の子どもたちの特徴として見られる。

3. Internalizing Problemsに対する緩衝要因

— 正常群から臨床群への移行を阻止する要因 —

今回の研究において臨床群に分類された子どもの数は全対象者の13.4%にあたる116名(内訳: <男子52名(10.7%)・女子64名(14.3%)>: <小6生76名(12.6%)・中1生18名(10%)・中2生5名(13.9%)・中3生

17名(15.0%)>)であり、Achenbach(1991)の原本に従った倉本ら(1999)の尺度得点換算の結果と比較してみると、想定される数の2倍以上の子どもたちが臨床群とされた。しかしながら、臨床群と判別された子供たちがみな慢性的なうつ症状になったり、問題行動に走ったりするわけではなく、その中の多くが日々の生活上のストレスから一過性のうつの気分を感じているだけなのではないだろうか。また、臨床群と正常群でのInternalizing Problemsと各説明変数との関連を検討した結果からは、臨床群の子どもたちが地域や家庭に対して低い評価をしていることが示されている。幸いなことに、パス解析結果から、臨床群とされた子供たちにとって〈教師の態度〉は自己価値を高め、間接的にInternalizing Problemsを緩衝する要因として働いていることが示されたが、しかしながら、地域や家庭からのサポートがもっとあれば、そして仲間からのサポートも得られれば、臨床群に分類された子供たちも正常群へと復帰できるはずである。今回の調査で、臨床群とされた子供たちにとって友人関係がInternalizing Problemsを緩衝する要因となっていないのは、おそらく、日々の生活の中で仲間との交流がうまくできず、友人関係でのつまづきが自分自身を落ち込ませる原因となってしまうようなことがたびたびあり、仲間に対して心を閉ざしてしまっているのかもしれない。

IV. 総合的考察

児童期・思春期の子供たちにとってうつの気分を感じずることは発達上やむをえないことでもあり、子どもたちの中の多くが日常生活の中で起こる様々なストレスに対して、大なり小なりうつの気分を感じているようだが、その感情を最小限にとどめさせ、そこから重大なInternalizing Problemsへと至らないようにするために、子供たちの自己概念を高めることが重要な課題であり、そしてそのためには子供たちを取り巻く様々な環境の中で、特に身近な周囲の人たちからの情緒的サポートが不可欠である。

子どもの精神的健康とそれに影響を及ぼす家庭環境・学校環境・地域環境の関連メカニズムを明らかにするために、今回は質問紙によって子ども自身の認知を指標として検討してきたが、実際にそれぞれの環境において子ども自身がどのような行動をとり、また、他のメンバーたちとどのようなコミュニケーションをすることでそのような認知が形成されたのか、そして、そのような認知を形成するに至るまで、その子どもがどのような発達を遂げてきたのかを確認するために、他のメンバーたちの認知を指標として検討することも今後必要であろうと考えられる。